

死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響

ミヤバヤシ サチエ ヤスダ ジン
宮林 幸江* 安田 仁^{2*}

目的 事故や自殺死に関する死の突然性が死別反応に影響するとされるが、突然の死に病死をも含めた比較検討はみあたらない。とくに国内に関しては、死別に関する実証的知見が不足し、死別状況による影響のみならず、群分けによる比較検討も充分になされていない。よって本研究では遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応への死因の影響を査定していくこととする。

方法 近親者との死別を体験した親・子・配偶者・従兄弟の428人が返答し、その中から死因が記されかつメモリアルリアクション（命日反応など）を考慮した178人に対し質問紙調査を実施した。そして回答を、自殺、事故死、急性死、病死（闘病期間1年未満）の4群に分類した。各群の身体的・精神的健康についてはGHQ・SRQ-Dにより、日本人の悲嘆の情緒を主とする反応はMiyabayashi Grief Measurement (MGM) により測定した。

結果 4群の得点順位はほぼ自殺>事故死>急性死>病死群の順となった。自殺・事故死・急性死のGHQ, SRQ-D得点が臨床弁別閾内、または弁別域を超えた。GHQの下位尺度である身体症状と不安不眠尺度に群間差は認められないが、不安不眠は死因に拘らず遺族全体に高得点であった。MGMでは、病死と比較した自殺・事故死との間で全4下位尺度に群間差が認められ、自殺遺族の死別反応は、最大と判明した。その一方で下位尺度の中の適応・対処の努力（高得点ほど、実行不可の逆転の項目）では最も非力であった。

結論 死因が死別反応に影響することが確認された。とくにその影響力は健康面より悲嘆の情緒反応において顕著と判明した。

Key words : 死因, 自殺, 事故死, 急性死, 病死, 死別の反応

* 宮城大学看護学部

^{2*} 日本悲嘆ケア研究所

連絡者：〒981-3298 宮城県黒川郡大和町学苑1
宮城大学看護学部 宮林幸江